

デューラー研究 第17

デューラーの「絵画論」(3)

男性均衡論の草稿の試訳

美術学科

下村耕史

Dürer's Drafts of his "On Painting"(3)

a translation by Koji SHIMOMURA

序

本稿は前2回の報告(第20巻, 1989年, 第22巻, 1991年)と同じく, Dürer: Schriftlicher Nachlass, herausgegeben von Hans Rupprich. Zweiter Band. Berlin. 1966. を底本として試みられたデューラー未完の「絵画論」の草稿の訳である。凡例は前回に従う。

(承前) Nr. 10. 11については今回は省略(人体比例習作に添えられた断片的記入のため。以後の省略部分も同じ理由による)

Nr. 12 8頭身の男性側面像。肢体部の長さ。腕の側面。男性正面像。腕の正面。男性背面像。
(1と2はロンドン草稿, 3は省略, 1513年かそれ以降, R. 2, 178~180)

1

男性頭部を描いた後, 頭部以外の肢体部をつぎのように描かなければならない。

男性側面像の肢体部から描き始める。

(全長の) 1/8の頭部をしかるべき位置に描く。

頭頂部からのどの凹みまで1/6である。

頭頂部から脇腹まで1/3である。

頭頂部から胸の乳頭まで1/4である。

のどの凹みから, 脇腹と腰の間の臍まで2/9である。そこが体部の[水平の]屈折線となる。

脇腹から肩の高さまで3/17である。

のどの凹みから臍まで1/5である。

肩の高さから腋下まで1/12である。

のどの凹みから胸下まで1/9である。

脇腹から腰の下端まで1/10である。

臍から陰茎まで1/9である。

脇腹から腹の下端まで1/8である。

足裏から足の甲まで1/18である。

腰と足の甲との中央に膝がある。その2部分にabを記す。

膝下1/8の所に脚の外側のふくらはぎ下端がくる。膝下1/7の所に脚の内側のふくらはぎ下端がくる。膝上1/28と膝下1/28の間に膝全体が含まれる。

男性の股間から1/10下の, 大腿背部には特別の隙間がある。

こうして肢体部の長さが測られたので, つぎに男性側面像の肢体部の厚さを同じ線上に測る。

顎下の首の厚さは1/15である。

肩の高さでの厚さは1/13である。

のどの凹みの線での厚さは1/12である。

腋での厚さは1/7である。

更に胸の乳頭での厚さは2/13である。

胸下の厚さは1/8か2/15である。

脇腹での厚さは1/8か2/17である。

臍での厚さは2/17である。

臍下での厚さは1/8である。

腰の厚さは2/15である。

腹下で臀部の上での体の厚さは2/15。

陰茎の上の体の厚さは1/8である。

男性の身の丈の中程、つまり臀部の下端での大腿部の厚さは1/9である。

その下1/10での厚さは1/11である。

膝上の厚さは1/13か1/17である。

膝中央の厚さは1/15か1/16である。

膝下の厚さは1/17か1/18である。

ふくらはぎ中央の厚さは1/13である。

ふくらはぎ下の厚さは1/15である。

足の甲の上の厚さは1/25である。

足の甲での厚さは1/23である。

足の長さは2/13である。その前の1/3に当たる部分が足指の長さである。

親指の厚さは足裏と足の甲間の下1/3に含まれる。小指の厚さは親指の1/2である。

図にみるように、[以上の長さの]線を上手に引き入れたのち、腕の側面[の長さ]をつぎのように測る。

2

肩の高さから肘まで1/5である。

肘から中指の先端まで1/4である。

手は1/10である。

つぎに腕の厚さを測る。

肩での腕の厚さは1/11である。

腋下での厚さは1/15である。

腕の力こぶでの厚さは1/17である。

肘での厚さは1/23である。

肘下での厚さは1/20である。

その下の厚さは1/28である。

手の厚さは1/38である。

手の上での厚さは1/29である。

つぎに男性正面像を測る。肢体部の長さはいま測られた側面像からとり、男性正面像の幅だけつぎのように測る必要がある。

頸部の厚さは1/16である。

○印の付されるのどの凹みの線での両肩関節間の幅は2/11である。

肩上で幅は1/4である。

乳頭間の幅は1/9である。

脇腹での厚さは2/13とするか、頑丈で肥えてい

るとすれば1/6とする。

腰上の幅は2/11である。

男性の身の丈の中央の幅は1/5である。

臀部の下の大腿部の幅は1/10である。

その下1/10の大腿部の幅は1/12である。

膝上の幅は1/15か1/16である。

膝中央の幅は1/17か1/18である。

膝下の幅は1/19か1/20である。

ふくらはぎ中央の幅は1/14である。

外側のふくらはぎ下端の幅は1/17か1/16である。

内側のふくらはぎ下端の幅は1/18である。

踝上の脚の下部の幅は1/33か1/32である。

踝での足の甲の幅は1/25である。

足の前の幅は1/16である。

足の踵の幅はその1/2である。

こうして図にみるように、この男性像の[測られた]全ての線を方形に引き入れる。

つぎに腕の正面の厚さ、つまり[この場合は]幅を測る。

肩の下の腕の幅は1/24である。

力こぶでの腕の幅も1/24である。

肘上の幅は1/24である。

肘下の最大幅は1/19である。

肘から1/10下での腕の幅は1/24である。

手の幅は1/34である。

手首の幅は1/19である。

図を裏返すと、直線と数字をみないで、形態だけがみられる。

男性の背面像はその正面像の[輪郭]線から引かれる。背面の両腋間の幅は1/5である。肩の高さから腋下まで1/11である。臀部の割れ目の長さは股間から1/11である。

[以下断片のため省略]

Nr. 13 男性の比例 (ロンドン草稿, 1512/13年, R. 2, 181頁)

つぎに肢体部間の大きさの別の分けかたをしよう。のどの凹みと顎上間を4等分する。のどは最上部を占め、肩肉は肩からかなりもり上がるが、

肩そのものは最下部でのどの線よりも上にくる。

肩関節はのどの凹みの線上にある。
 のどの凹みから腋下まで1/12である。
 男性背面の両腋間の幅は2/9である。
 臀部の割れ目の長さは1/11である。
 踵の幅は足の前幅の1/2である。

Nr. 14, 15は省略。

Nr. 16 等比数列により、ある長さを3部分以上に分けること。フェアグライヒャーの構成 (ロンドン草稿, 1513年頃, R.2, 183~184頁)

1

初めの最長部分が第2部分に対する比例関係が、第2部分が第3部分に、第3部分が第4部分に対して同じになるように、ある長さを3部分かそれ以上に分けること。

つぎのようにする。

長い2線をもつ三角形をつくる。鋭角を a とし、 a から長い水平線 b と斜線 c を上に向けて引く。2線 bc を線 de と交差させれば、三角形 ade が得られる。

その長さが相互に等比関係にある3線あるいはそれ以上の線を引きたいと思えば、線 de を、それらの線と同じだけの数に等分する。

等比関係にある線の数を最少に、つまり3にする。線 de を2点で3等分し、点 a から2線 fg を引く。4線 $cfgb$ は、必要に応じて長くする。一方ある長さをきめて、それを薄くて小さな直定規に移し、上を j 、下を k とする。[jk 間の j に近い] 最初の区切りを l とする。点 l を線 af 上に定め、点 l を固定したままで、点 j が線 ac に、点 k が線 ab に接するまで定規をずらしていけば、定規は、 jm 間が線 af により l で分けられるのとおなじ比例で、 lk 間は線 ag により m で分けられる。

[m は文中で説明されていないが、 $jl : lm = lm : mk$ として想定されている点である] [以下省略]

2

等比数列の関係にある線を引く別の方法。つぎのようにそれをする。

水平線を引き、長い垂線と短い垂線をかなり離して水平線上に立てる。長い線の上を a 、下を b とし、短い線の上を c 、下を d とする。つぎに定規を ac 上において、 a から線を引いて水平線と交差させ、その交点を x とする。2本の垂線 ab と cd 間に立てるはずの線と同じ数の点を、線 ab 上に等間隔に定める。この図では ab 上に3点を定めるものとして、それを1,2,3とする。これらの点から直線を引いて点 x と結ぶ。つぎに斜面 bc を引いて、 bc が点1,2,3と点 x を結ぶ線と交差する3点を求め、それらの点を通して ac と b

[d] 間に垂線を立て、それらが2本の垂線 ab , cd に平行になるようにする。 ab に近い垂線の上を e 下を f 、第2線の上を g 下を h 、 cd に近い第3線の上を j 下を k とする。こうすればこれらの線[の長さ]は等比数列の関係にあることになる。この図法により、つぎに見られるような図形も作ることができる。[これらの図形の素描は今日失われている]

Nr. 17 男性肢体部間の長い部分の関係。等比数列による分けかた。男性側面像。フェアグライフェリン (ロンドン草稿, 1512/13年, R.2, 184~190頁)

1

肢体部間には等比数列をなす長い3部分がある。

それは以下の意味においてである。

胸、背中、腰、腹からなる体部は完全に不分離の一体をなす。この体部は多くの部分からなるので、長くなる。それはのどの凹みの高さから大腿の付け根に当たる腰の下端までである。それは[人体で]最大最長部分である。強部が弱部に勝るのは、自然の理である。それで人の肢体部の上部が下部より長くて強くされているのは、理に適っている。腕、手、指、脚、足、足指によくみられるように、肢体部の下部が上部に支えられるためである。下

部であるほど、それだけ小さく短い。

それで最長部である体部の大腿部に対する長さの比が、大腿部の脛骨に対する比と同じになるように[上記の]3つの大きな肢体部の長さをきめて、最強部が最長になるようにしよう。

こうして膝の中央をどの位置に定めたらよいかというような、まだきまっていなかった男性の長さについても記される。人体では[上記のような]等比数列をなす3つの長さに特に注意が払われなければならない。最初の長さはのどの凹みから腰の下端までである。そこから膝の中心までが第2の長さである。第3の長さは膝の中央から脛骨の足の甲の下の踝の下端までである。体部はのどの凹みから腰の下端まで多数部分の集合であるが、それは全く一体をなす強く長い部分である。またそうあることが必要なのである。強部が弱部に勝ることは、自然の好むところである。それで、脚、足指、腕、手、手の指によくみられるように、人の最長部たる体部がより小さな下部を完全に支配して適切に動かすことになる。肢体部の先ほど、それが上げられ易いように、より小さくより短い。それで、のどの凹みから腰の下端までの体部は最長で、腰の下端から膝の中央までの第2部分はより短かく、膝の中央から脛骨の下の外側の下端までの第3部分は最も短いというように、3肢体部を順次におこう。

それはつぎのことを意味する。最初の長さの第2の長さに対する比は、第2の長さの第3の長さに対する比と同じである。最初の長さはのどの凹みから腰の下端までと記され、他の2部分を合わせた長さは、[腰の下端から]足裏から1/28上の脛骨の外側の踝の下端までとされる。その間の膝のある位置が、等比例 (dy recht fergleichung) をなす分岐点である。それをつぎのようにして求める。膝の位置が等比例の分岐点である。それをつぎのようにして見いだす。

2

[冒頭部省略]

足裏から足の甲の高さまで[全長の]1/18である。

この高さは3等分され、親指は下の1/3に含まれる。

強部が弱部につねに先行することを知らねばならぬ。人体でもそうである。壮健な体では上にある肢体部が下の肢体部よりつねに強い。上部が下部を動かすためである。

強部には等比数列をなす (vergleichlich) 長さと同様性が伴わねばならぬことを、我々は知っている。手、腕、足、脚の肢体部では、下部が上部より短く細いことを、我々を見る。体の最大部でもそうである。それで男性の長い3肢体部の側面をみてみよう。

のどの凹みから腰の下端までが、最初にくる最大最強の肢体部である。それは多くの小部分を含むけれども、断片ではなく1肢体部とそれを呼ぶことにする。しかもそれには他の肢体部を動かす力と強さがある。それで体部は最大最強の肢体部でなければならない。それでその長さを最大と前に書いたのである。より小さい他の肢体部は、それと等比関係 (vergleichen) にならねばならぬからである。体部につづいて強い男性の肢体部は、腰と膝中央間の大腿部である。それは体部より少し短くされねばならない。

第3の肢体部は膝と足の甲との間の脛骨で、大腿部より少し短くされねばならない。

最上部の長さの第2のそれに対する比は、第2のそれが第3のそれに対する比と同じになるように、これらの3肢対部の長さを、等比例させていかなければならない。それでのどの凹みから腰の下端までの最初の長さがどうあるべきかをここで記しているのである。

腰と足の甲の間の長さをどう扱うかがまだ残っている。それを前記した三角形 a b c による方法により、等比例になるようにその部分を区切らなければならない。それで小定規上にのどの凹みと足の甲の間の長さを取り、定規上に腰の点を記せば、最初の長さが得られる。前述したように、その定規を三角形 a b c 上におけば、他の2部分が最初の部分に対して等比例の関係にあるのが見いだされる。こうして最初の長さの第2のそれに対

する比は、第 2 のその第 3 のそれに対する比と等しくなる。つぎの男性像はこの方法により 3 分される。

のどの凹みと足の甲の間の長さをとり、用意したものにそれを記す。のどの凹みから腰下端までの体の最初の長さをさらにそれに記せば、最初の部分が得られる。その長さを前記の三角形上におけば、最初の長さの第 2 のそれに対する比は、第 2 のその第 3 のそれに対する比に等しいという、等比例の関係にある他の 2 部分の長さが見いだされる。つぎの男性像はこの方法により 3 分される。

3

[冒頭部省略]

足裏から足の甲の高さまで $1/18$ である。この高さを 3 等分する。親指は最下部の $1/3$ に含まれる。

つぎに体部に対して等比例の関係になるように、大腿部を区切ることが必要である。

それで強部は弱部につねに先行することを知らねばならぬ。人体でも同様である。

壮健な体では上にある肢体部が下の肢体部よりつねに強いことがふさわしい。上部が下部を動かすためである。手、腕、足、脚の肢体部では、下部は上部よりつねに短く小さいことを我々が見て知っているように、強部には等比数列をなす長さや厚さが伴わなければならない。それで男性の長い 3 肢体部を互いに等比数列をなすように区切ろう。

のどの凹みから腰の下端までは 1 つの長さであり、それに含まれる一切は一体なのである。それは、他の一切の肢体部がその強さにより動かされる人体最強部であるので、最長でなければならない。他の 2 肢体部がそれと等比例をなすことができるように、その尺度を記した。

体部のつぎに長い肢体部は腰から膝の中央までの 2 本の大腿部である。それは上の肢体部より短い。第 3 の長さは膝と足の甲の間の 2 本の脛骨であり、上記の 2 肢体部に比べて最も短い。

最初の長さの第 2 のそれに対する比が、第 2 の

その第 3 のそれに対する比と同じになるように、これらの 3 肢対部の長さを、等比例させなければならない。

この等比例による人体の分けかたをなすには、前述の方法によらねばならない。つまりのどの凹みと足の甲の間の長さを準備したものに記し、それに前記の最初の長さ [のどの凹み-腰の下端] をさらにそれに記せば、他の 2 肢体部と等比例の関係にある最初の長さが見いだされる。その長さを前記の三角形上において、前に教えたように、それの上でずらしていけば、脛骨の大腿部に対する比が、大腿部の体部に対する比と同じになるように、他の 2 肢体部が見いだされる。

こうしてつぎの男性像を 3 分する 3 肢体部の長さが得られる。

[紙葉の左縁に]

鏡と同様に、我々の眼は自然から提供されるあらゆる種類の形態を捉える。

4

頭部を描いたので、その長さを全長の $1/8$ として、その位置に定める。そして最初に他の肢体部の長さを区切る。

頭頂部からのどの凹みまで $1/6$ である。

頭頂部から乳頭部まで $1/4$ である。

頭頂部から脇腹まで $1/3$ である。

頭頂部から身の丈の中程まで人体は一体であるが、下半身は 2 分される。

のどの凹みから臍まで $1/5$ である。

のどの凹みから前の腋まで $1/14$ である。

腋から肩の高さまで $1/12$ である。

頸から胸下まで $1/7$ である。

のどの凹みから胸骨の下端まで $1/9$ である。

乳頭の高さから腰の下端まで $1/5$ である。

脇腹と腰の下端間の中央に特別の線が引かれる。体部はその微妙な線で大腿部から分かれる。男性像を描くには、それを適切になさねばならない。

臍から腹の下端まで $1/10$ である。

臍から陰茎まで $1/9$ である。

胸下から臀部の下端まで1/4である。

男性像の股間から大腿部の特別の隙間まで1/10である。

足裏から足の甲の高さまで1/18である。

体部は最大の肢体部として区切られるので、膝を適当な位置に定めることが必要である。強部は弱部をつねに動かすことを、我々は知っている。人体では特にそうである。腕、手、指、脚、足、足指で先の方が後ろの方より短くて小さいのが見られるように、後ろの方が先の方を動かすために、より長くより厚いことがふさわしい。それで最強部が最長になるように、最長の3肢体部の長さを互いに等比例の関係におきたい。

最初にくる最長の肢体部を、のどの凹みから腰の下端までの体部と定める。それは一体化された集合体であり、他の肢体部を動かす完全な強部である。

体部のつぎに長い肢体部は腰から膝の中央までの2本の大腿部であり、これらは上記の体部より短くなければならない。

3番目に長い肢体部は膝と足の間の脛骨であり、最長の3肢体部のなかで当然最も短い。

最初の長さの第2のそれに対する比が、第2のそれの第3のそれに対する比と同じになるように、より小さい2肢体部をより大きい肢体部に等比例させなければならない。

より小さい2肢体部をより大きい肢体部に等比例させるには、特別の方法によらなければならない。第1の第2に対する比は、第2の第3に対する比と同じであることが、肝要である。

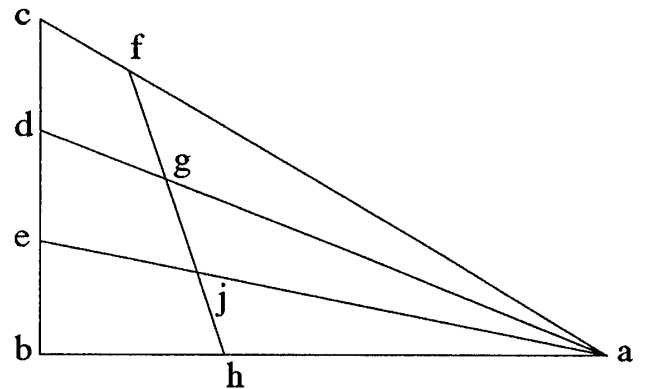
エウクレイデスはそれを定める。・・・

その定理をもちいて、最初の長さを定め、それと等比例の関係にある他の2つの長さを決めなければならない。それをつぎのようにする。

三角形abcを作る。bは直角である。下辺abは水平である。それでbcは垂線である。

bcを2点deで3等分して、角aから2直線を点deに引く。

この三角形を利用して等比例に分けようと思えば、つぎのようにする。



定規にのどの凹みと足の甲の間の長さを記し、のどの凹みを f、足の甲を h として身長を f h とし、腰の下端を g とする。

定規の点 g が線 ad 上にくるようにし、点 g が線 ad からそれないようにして、定規をずらす。fhg がそれぞれ3線 ca, ba, da に接するまで定規をずらせば、線 ae は等比例をなすように定規と交差し、等比例をなすように3部分に分ける。こうすれば、最上部の長さの第2のそれに対する比は、第2のそれの第3のそれに対する比と同じになる。それらは同一部分で分けられている。線 ae と定規との交差点を j とする。それが膝の中央になる。

角 a と点 cdeb を結ぶ4線は必要に応じて伸ばすことができる。上部をより大きくするには、[定規の]上を点 c、下を点 a の方にずらせばよい。下部を大きくするには、その反対にすればよい。つぎの図でそれは分かるであろう。この図法をフェアグライフェリンとよぶことにする。それは巧みに等比例を作る。

Nr. 18, 19, 20 省略

Nr. 21 線 AB 上の8頭身男性像の比例。膝の位置の定め方。男性 AB を、線 A₁BB₁ 上の7頭身の男性に変えること。男性 AB を、8頭身 A₁BB₁ に部分的に変更すること。男性 A₁BB₁ の頭部側面・正面・背面像の長さ、厚さ、幅の大きさ (ロンドン草稿, 1512/13年, R.2.193~195頁)

1

男性の全身像について記し、頭頂部から足裏まで測定しよう。

それをつぎのようにする。最初に述べたように、長さ a b を定めて、その間に垂線を引く。最初にこの線上に男性側面像を作ることにする。同じ高さで長さの線をその横に立てる。その線上に男性正面像を作ることにする。男性の各肢体部の長さを測り、それらをすべて線 a b 上に点記し、水平線をそれらの点に通し、[各肢体部の] すべての名称を添記する。以下のように測り始める。

2

男性の全身像について、頭頂部から足裏まで測定しよう。

前述の通りにする。男性の身長を表す垂線を立て、上を a 、下を b とする。最初この線上に男性側面像を作ることにする。同じ高さで長さの線をその横に立てる。その線上に男性正面像を作ることにする。男性の各肢体部の長さを測り、それをすべて線 a b 上に点記し、水平線をそれらの点に通し、その位置を知るために、すべての名称を添記する。以下のように測り始める。

頭頂部 a から [全長の] $1/8$ に顎先がくる。顎先から $1/10$ が額の上端であり、髪際である。あるいはそうしたければ、顔の長さを $1/9$ にしてもよい。顔を 3 等分し、それに額、鼻、口、顎を含ませる。

頭頂部から肩の高さまで $2/13$ である。

頭頂部から のどの凹みまで $1/6$ である。

〃 胸部の高さまで $1/5$ である。

〃 臀部の下端まで $1/2$ である。

以下分肢する。

のどの凹みから 前の腋まで $1/12$ である。

〃 乳頭まで $1/9$ である。

〃 胸下まで $1/8$ である。

〃 脇腹まで $1/11 + 1/12$ である。

〃 臍まで $1/9 + 1/10$ である。

〃 腰の上端まで $2/9$ である。

脇腹から 腰の下端まで $1/9$ である。

〃 腹の下端まで $1/8$ である。

脇腹から 陰茎まで $1/7$ である。

〃 臀部の下端まで $1/6$ である。

男性の股間から $1/9$ 下の大腿部の内側に、特別の隙間がある。

足裏から脛骨の外側の踝まで $1/32$ 、足裏から足の甲の高さまで $1/20$ である。

大腿部と脛骨が体部と等比例の関係になるように、膝の位置を適当に定める必要がある。体部は最大最強の肢体部として作られており、強部が弱部を動かすことが自然に明らかであるように、体部は他の肢体部を動かす。

[つぎの文との間に、Nr.17の4で説明されたフェアグライフェリンと人の全長を記した定規の記述があるべきであるが、欠落している。つぎの2文の記述については上記の箇所を参照のこと]

上部をより大きくするには、定規の上を点 c 、下を角 a の方にずらせばよい。上部を小さく、下部を大きくするには、その反対にすればよい。

点 a から4線 c d e b を延ばせば、より大きな肢体部間の等比例を測ることができる。

この[8頭身の]男性像を7頭身にすることができる。それをつぎのようにする。顎と足裏間の長さをそのままにして、それを6等分する。その $1/6$ を頭部の方形の高さとする。すると頭部は[全長の] $1/7$ になる。最初の頭部と同じ区切り線を新しい頭部の方形に引けば、つぎの垂線 aa_1bb_1 上に描かれるように、7頭身の男性像が得られる。頭部がより厚く幅広くなるだけで、他の部分は何も変わらない。頭部が大きくなるのは、そのためである。[この草稿からデューラーの人体比例タイプの作成が8頭身から始められたことが分かる。8頭身から、7、9頭身へと進み、後に7 $1/2$ 、10、第2の8頭身が加わる。R.2, 195註1参照]

つぎに最初の男性像の肢体部を長くして、より良い形体になるように、その部分を変えよう。

膝の $1/40$ 下に内側のふくらはぎ上端がくる。

膝の $1/80$ 下に外側のふくらはぎ上端がくる。

男性側面像の大腿部の厚さは、股間の $1/9$ 下で $2/17$ である。

つぎに男性側面像の幅を以下のように変える。

肩の高さでの幅は1/5である。
 両肩関節間の幅は1/5である。
 肩と胸上の幅は2/7である。
 両腋間の幅は1/5である。
 乳頭間の幅は2/15である。
 腰の下端の幅は2/9である。
 臀部の下の大腿部の幅は1/9である。
 内側のふくらはぎの上の脛骨の幅は1/17である。
 腕の正面の腋下の幅は1/22, 力こぶでの幅は1/21, 肘での幅は1/23である。

他の部分は, つぎの図 aa と bb にみるように, 最初と同じである。

後ろの両腋間の幅は1/4である。

もしそうしたければ, この男性像を線 ab 上で変えてもよい。足の甲の高さを1/24以上にはしないで, のどの凹みと足の甲との間を等比例の関係を保持しながら下に延ばし, 足から減じた分の長さを膝とのどの間に・・・加える。するとよい形体になるであろう。

3

[省略]

Nr. 22 次稿に掲載予定

Nr. 23 線 AABB 上の男性とは別の 8 頭身の強壯な男性 (ニュルンベルク草稿, 1513 年以降, R. 2, 211~212 頁)

つぎに甚だ粗野な 8 頭身の強壯な男性について記そう。[Nr. 22 の] 線 aabb 上の男性像とは幾つかの部分で大いに異なる。それをつぎのように作る。

最初に 3 本の垂線を平行に立てる。最初の線は男性の側面像, 第 2 の線は正面像, 第 3 の線は背面像のためである。肢体部の長さを記す点に水平線を通す。前と同様に, つぎのように測定を始める。

頭頂部から顎の下端まで1/8である。

顎の下端から額の下端まで1/10である。

額の下端と顎の下端の間は 3 等分される。最上

部に額, 第 2 部分に鼻, 眼, 耳, 第 3 部分に口と顎を作る。

頭頂部から のどの凹みまで1/6である。
 ♪ 胸の高さまで1/5である。
 ♪ 乳頭まで1/6+1/11である。
 ♪ 胸下まで1/6+1/10である。
 ♪ 胸骨の下端まで1/6+1/9である。
 ♪ 脇腹まで1/3である。
 ♪ 臀部の下端まで1/2である。
 ♪ 足裏の下端まで1/1である。

足裏から脛骨の外側の踝まで1/30である。
 足裏から足の甲の高さまで1/20である。
 脛骨の外側の踝の下端から膝の中央まで1/4である。

つぎに足の甲と膝中央の長さが第 3 の比例項になるように, のどの凹みと膝中央の間に 2 つの比例項を, フェアグライヒャーにより作る。それで, 最初の最長部はのどの凹みから腰の下端まで, 第 2 の長さは腰の下端から膝中央まで, 第 3 の長さは膝中央から足の甲の高さまでとなる。

のどの凹みから 前の腋下まで1/14である。
 ♪ 後ろの腋下まで1/13である。
 ♪ 臍まで1/5である。

脇腹から腰の上端まで1/18である。

脇腹から陰囊下端の臀部下の第 2 の線まで2/11である。

臍から 腹の下端まで1/10である。

♪ 陰茎まで1/9である。

臀部の下端から 大腿部間の隙間まで1/11。

♪ その下の第 2 の線まで1/9。

膝中央から 膝上の内側まで1/30である。

♪ 膝上の外側まで1/20である。

膝中央から 膝下の外側まで1/80である。

♪ 膝下の内側まで1/40である。

♪ 外側のふくらはぎ下端まで1/10。

♪ 内側のふくらはぎ下端まで1/8。

(Nr. 17 の 4 に付した略図は, ルップリッヒによる掲載図を利用した。R. 2, 190 参照。ただし図中の文字は本文に合わせて変えられている。)